

〈中のロゴス〉総括

〈あいだ〉ではなく、〈中〉に照準を定めた最新の著書『〈中〉のロゴス——東アジアの目から』。→① 自身の研究歴において、また哲学の歴史全般に対して、新著がアピールできる論点があるとするれば、それは何か。研究生活の到達点を提示する。

I 〈あいだ〉ではない〈中〉へ

・〈あいだ〉から区別される〈中〉

- (1) 〈中間〉から〈間〉を外した〈中〉そのものを考えなければならない。→②
- (2) 〈中〉の三つの意味（『中庸』）——初発性・中間性・的中性。→③
- (3) 〈中〉は、「論理」よりも「道徳」として生きられる。

・〈中〉に対する二つの形而上学的態度

④最高峰をめざすために、〈中間〉を否定し排除する——〈中〉からの離反。

→イデア論（プラトン）以来の西洋形而上学＝「頂極主義」

⑤〈中〉を人間道徳のみならず、宇宙全体を貫く根本原理に仕立てる。

→「中庸」の理念と易の宇宙原理とを結びつける中国の形而上学。

・④とも⑤とも異なる第三の行き方＝「非形而上学」

◎経験のうちに〈中〉の三つの意味を活かす。

→日本における〈道の文化〉は、実践に即した〈中〉のロゴス（中道）を展開する。

II 〈あいだ〉としての〈中〉

・〈道〉に活かされる〈中〉の意味

- (1) 初発性：入門から始まる修業には終わりが無い。人生は道そのもの。
- (2) 的中性：「節に中る」絶対の瞬間——ex. 「見事一本！」——が成立する。
- (3) 中間性：〈中〉と〈あいだ〉が結びつくあり方。

・「中間性」とは「媒介性」である。→④

〈道〉は、先導者（先達）によって開かれる。先達は生きた手本として、後進を〈道〉の前途に導く「媒介者」である。→人と人の〈あいだ〉を開く実践。

◎〈中〉（中道）のロゴスを、頂極主義に席卷された世界を変えるための橋頭保としたい。

[資料]

① 書物の全体構成

はじめに

第Ⅰ部 〈中〉への問い

第一章 中の論理

第二章 〈中〉からの離反

第三章 〈中〉の形而上学

第Ⅱ部 中道に向けて

第四章 かたちの論理

第五章 〈道〉のロゴス

第六章 中道のゆくえ

おわりに

② 〈中〉の定義

「中とはただ二つのものの間にあることをではなく。それが二つのものの孰れでもなく、そしてそれ故にそれらの孰れでもあり得ることを意味する」（山内得立『新しい道徳の問題点』理想社、1958年、74頁）。

③ 「中庸」の本質

「喜怒哀楽の未だ発せざる、これを中^{ちゅう}と謂う。発して皆節^{みなせつ}に中^{あた}る、これを和と謂う」

（喜・怒・哀・楽などの感情が動き出す前の平静な状態、それを中という。感情は動き出したが、それらがみな然るべき節度にぴたりとかなっている状態、それを和という）（『大学・中庸』金谷治訳注、岩波文庫、1998年、144－5頁）。

④ 「媒介性」としての「中間性」

「「中間性」とは、つまるところ「媒介性」にほかならない。ここまでの反省をつうじて、媒介が問題になる局面が二つ挙げられたことになる。一つは、〈道〉を極めようとする修業の行程。武道の修業に典型的な心身のトレーニングでは、〈かたち〉と〈かた〉とがたがいに媒介し合う関係によって、〈かたち－かた〉複合が生成発展する。……もう一つは、対話に代表される社会的実践の局面である。……求道と対話、一見無関係と映る二種の行為は、いずれも〈あいだ〉を開くための必須条件である」（木岡伸夫『〈中〉のロゴス——東アジアの目から』萌書房、2026年、217－218頁）。

[概要]

本の内容は多岐にわたる。哲学塾の各位には、私の研究歴の総決算である旨を伝えたい。
このたび『〈中〉のロゴス』によって開かれた風土学的地平は、次の三点に要約される。

- (1) 『〈あいだ〉を開く』の実践篇
- (2) 〈かたちの論理〉の完成版
- (3) 「頂極主義」と「中道主義」の対決図式

ここで三点を網羅的に語ることは無理。(1)に焦点化して説明する。

I 〈あいだ〉ではない〈中〉へ

過去、〈あいだ〉と〈中間〉とをゴッチャにしていた——cf. 《between A and B》。

〈中〉と〈あいだ〉の違いが見えていなかった——「中の論理」(山内得立)への疑問。

→〈中間〉から〈間〉を除いた〈中〉、にどんな意味があるか？

→「中庸」への注目によって、〈中〉の三つの意味に行き当たる。

→初発性・的中性は、中間性に特化した「中の論理」では表現されない。そこから、理論に傾斜するインドとも中国とも異なる、実践本位の日本の〈道〉に注目。

→〈中〉+〈道〉=中道。中道のロゴスは、④西洋にも⑤中国にもなく、③日本に成立して、独自の発展を遂げた。

II 〈あいだ〉としての〈中〉

・〈中間〉から〈間〉を切り離す手続き (I) の後、ふたたび〈中〉に〈あいだ〉を接ぎ直すと、どういうことが言えるか——II。

・〈中のロゴス〉=〈中道のロゴス〉は、東アジアの〈中心〉(インド、中国)ではなく、〈周縁〉である島国日本に展開した。インド・中国のように、思想としてオリジナルではなく、二番煎じであるというのが、周縁である日本文化の特徴である。オリジナルに要求される論理・形而上学は、日本には不要、もっぱらその応用に努めることが、日本の行き方となる。こうして独自の応用版である〈道の文化〉が、成立し展開することとなる。

・新しい発見——新著の完成間近に至って、〈中〉の意味する「中間性」が、「媒介性」に読み換えられるということに気づく。いったん〈中〉から切り離された〈あいだ〉を、ふたたび〈中〉とかみ合わせることによって、〈道〉における中間性を媒介性とする解釈が生まれてきた。〈あいだ〉を開くことは、単に二つのものの中に立つことではなく、二者を媒介するということである。

→求道における先導者(先達)、対話における仲介者→④

・〈道〉は、先導者(先達)によって開かれる。先達は生きた手本として、後進を〈道〉の前途に導く「媒介者」である。→人と人の〈あいだ〉を開く実践のモデルが完成した。